



ハワイに生きる家族の姿 オハナストーリー

「オハナ」とはハワイ語で「家族」の意。
今もハワイでは家族の絆がとて大切にされています。

Text & Photos: Yuko Ishikawa



ハワイ島を守る日系農園 アカツカ・オーキッド・ガーデンズ

ラン栽培に適した環境だとされるハワイ島。数多くのラン農園が存在するが、観光客に一番有名なオーキッド・ガーデンと言えは「アカツカ・オーキッド・ガーデン」だろう。美しいランはもちろんのこと、ビジターセンターやオリジナル商品を通してハワイ島からランの魅力を発信し続ける日系ファミリーの、今までとこれから。

ハ

ワイ諸島最大の島、ハワイ島。その大きさは日本の四国の半分ほどで、他のハワイ諸島すべてがすっぽりと収まってしまふほど。その「大きさ」は面積だけではなく、世界に13ある気候帯のうち11が存在し、今もなお活動し続ける2つの火山が存在するなど、ハワイ島が持つ大自然の「懐」の深さも含めて、ハワイのローカル（地元民）たちはこの島を、敬意を込めて「ビッグアイランド」と呼んでいる。

「ビッグアイランド」という愛称

1946年のアリューシャン地震と1960年のチリ地震による2度の津波被害にもくじけず復興したのは、忍耐強く勤勉な日系人の力によるところが大きいだろう。

モリヤスさんがハワイ島へとやってきた1974年頃のハワイ島ヒロも、町のビジネスは日系の経営が多かった。
モリヤスさんは「ゴルフとお酒。今も日本人が大好きな『ビジネス・ツール』によって、私もこの島でのビジネス人脈を広げることができました」と笑う。ハワイ島へ移住したばかりの頃は英語も話せなかったが、ゴルフやお酒を通してヒロの日系ビジネス関係者たちと知り合い、親交を深め、そのコネクションは今日ま

がハワイの住人たちによって付けられたものだとするならば、メインランド（米国本土）の人間たちによって名付けられた愛称は「オーキッド・アイランド」（ランの島）。

アジアにも近い南国ハワイに、どこかオリエンタルな面影を重ねるメインランドの住人たちは、ランの甘い香りにも似た淡い憧れを持ってこの島をこう名付けた。

その名の通り、ハワイ島の、特にボルケーノ地区ではハイウェイ沿いにも多くの野生のランを見つけることができる。ボルケーノ地区は、標

で続いているのだという。

農園の創業時は、小さな温室で、切り花として販売するシンビジウムシンビジウムの栽培が中心だった。育った花は主にメインランドへの輸出。ところが、シンビジウムの花が咲くのは、1年のうち冬季の4〜6カ月のみ。1年の半分以上が閑散期となってしまう。このままではいけないと、カトレアの苗の販売（主にメインランドへの輸出）へと事業を広げたのが82年のこと。この頃には、息子のタケシさんも生まれた。

創業時と同じ場所で 世界中から人を迎える

84年頃には、卸しだけではなく、



1



2



3

① ビジターセンターではコショウランやカトレヤ、シンビジウムなど500種類に及ぶランを購入することができる ② モリヤスさん（左）は随時カトレヤの「新種」を開発している ③ 温室には10万株を越えるランの苗が。従業員たちも皆ランの育成についての教育を受けている



タケシさんを抱く、若き日のモリヤスさん。店舗を設け、小売業を始めたのもこの頃。現在のビジターセンターは40年前の農園創業時と同じ場所にある

高が高いために年間を通して涼しく、雨が多いため適度な湿度を保つことができる。こうした土壌は、ランにとっては最高の条件を備えているのだという。

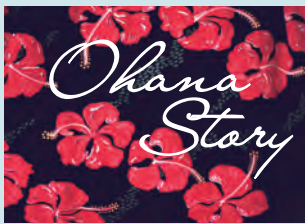
日系人の町で始まった 「ランの島」ビジネス

そんな「オーキッド・アイランド」を守り続けるオハナの「ランの島」を、ボルケーノで「アカツカ・オーキッド・ガーデンズ」を営む、赤塚モリヤスさんとタケシさん親子だ。
モリヤスさんは1974年に単身

小売業も開始。現在のビジターセンターの原型が誕生した。

「アカツカ・オーキッド・ガーデンズ」は、ヒロからハワイ火山国立公園へ向かうハイウェイ11号線沿いにある大きな建物が目印。40年前、農園も同じ場所からスタートした。90年頃、モリヤスさんが「観光客が気軽に立ち寄れるように」と大きな駐車場を作り、農園に店舗を併設。この頃から本格的に小売業に尽力し始める。

現在、ビジターセンターは無料で開放されており、大きな観光バスも立ち寄るなど、毎日世界中から多くの観光客が訪れている。色とりどりのランが並ぶセンター内はギャラリー兼即売場となっていて、地元



ハワイに生きる家族の姿
オハナストーリー



左から、創業者のアカツカ・モリヤスさん、
息子タケシさんの妻コリンさん、タケシさん



アカツカ・オーキッド・ガーデンズ
Akatsuka Orchid Gardens
11-3051 Volcano Rd., Volcano, HI 96785
TEL: 808-967-8234
営業時間: 10:00am~4:30pm
akatsukaorchid.com



4



3



2

① 創業者のモリヤスさん
② ランの苗が育ち、花を咲かせるまでには2~3年かかる ③ タイの職人が一つ一つ手作りしているマグネットはギフトショップの大人気商品 ④ ビジターセンターでしか食べることができないオリジナルの「ポハベリー・アイスクリーム」

世界に羽ばたく ハワイ島生まれのラン

ラン愛好家たちもやってくるのだとか。

残念ながら、日本に持ち帰ることができないのは、土がついていない、ペットボトルに詰められた小さな苗のみ。日本に持ち帰り、上手く育てることができれば、3~4年ほどで花が咲く。

取材に訪れたこの日、「3年前に日本に持ち帰り、大切に育てた苗から咲いた花が賞を取った」と日本のお客さんが、今朝、メールをくれたんですよ」とモリヤスさんがうれしそうに教えてくれた。

新種の花作りに余念がないモリヤスさん。これまでも数え切れないほどの「新種」を生み出してきた。「ボルケーノ・クイーン」「ボルケー

ノ・プリンセス」「ユキ」などの品種はモリヤスさんの手によるものだそう。

花が大きく、色鮮やかなもの同士をかけ合わせ、「ハイブリッド種」を創作する。その花が咲くのは、交配してから早くて5~6年後。どんな花が咲くのかは、神のみぞ知る。自分が交配したランたちを見届けるためにも「長生きしなくてはイケませんね」とモリヤスさんは笑う。

新しい試みでランと ビジネスの未来図を描く

一方、ビジターセンターの新しい「目玉」は、世界初だという「ランの迷路」。約225坪もの広さの迷路の中には、カトレヤが壁一面に

オーキッド・ファームの看板商品になるのでは？との期待も高まる。

力を入れているオリジナル商品はこれだけではない。ランの香りのフレグランスやボディローション、ハンドクリームはここでしか購入できないこともあり、ギフトショップの人気商品になっている。

また、これを目当てにやってくる人も少なくないというオリジナルのマグネットは、モリヤスさんが自らタイまで出向き、職人と独占契約を結んで作っている。ランやハイビスカスなどトロピカル・フラワールのクレイ・アート。それぞれが完全な手作りなので、どれも真正正銘の「一点もの」。見れば見るほど感心して

飾られたコーナーや、ランの成長過程が学べる展示物、アカツカ・オーキッド・ガーデンズの歴史がわかるパネルや、ランやトロピカル・フラワーで飾られたインスタジェニックなフォトスポットなどが設置されている。

タケシさんが持つ今後のビジョンは、こうした「体験」の機会を増やしていくこと。農園を訪れるお客さんたちが、タケシさんをはじめ、農園で働く人たちとフェイス・トゥ・フェイスで触れ合い、ランの植え替えのワークショップなどを通して実際にランを見て・触れて・知るきっかけを作っていきたいと語る。

現在、農園では「ランのエキスパート」と言えるほどのトレーニングを受けた従業員たちが、日々、10万株ものランの育成に励んでいる。近年は、ランだけではなく、茶葉や、ハワイ島ボルケーノ地区特産の食用ホオズキ「ポハベリー」の栽培にも力を入れている。さわやかな酸味が特徴の「ポハベリー」だが、ア

しまうほど、丁寧に細かく作られた「小さなアート」だ。特に日本からの観光客には人気で、たくさんまとめ買いく人もいるのだとか。

2代目となるタケシさんも、オアフ出身のコリンさんと結婚し、今年で3歳になる愛娘キラちゃんも誕生した。モリヤスさんは初孫のために新種のカトレアを開発し、彼女の名前をとって「ケンジー・キラ・アカツカ・ボルケーノ・クイーン」と名付けた。自らの手による新種には「クイーン」や「プリンセス」の名を冠してきたモリヤスさん。キラちゃんという最愛の「プリンセス」が誕生したことで、これからも多くの新種を生み出していくことだろう。